

Bull Rider

芝原仁一郎

Jinichiro Shibahara

FILE#23



8秒間にすべてを賭ける 大和魂のカウボーイ

言葉の壁や国境を越えて世界で活躍している、「あっぱれ」な日本人を紹介するこのコーナー。今月は、ブル・ライディングのプロとして活躍している、芝原仁一郎さんにお話を伺います。暴れる牛に8秒間乗り、その乗り方と牛の暴れ方で採点されるという危険なスポーツ。芝原さんはなぜこの世界に足を踏み入れ、チャレンジを続けているのでしょうか？

text: Yoko Tanaka photos: Scott Klepper

勝負は8秒! ロデオの花形、 ブル・ライディング

8秒間という時間は、あなたにとってどんな長さだろう? ミルクの1杯も温められない、あくび一つする間に過ぎてしまうほど短い時間。そんなわずかな刹那で、命懸けの勝負に挑むプロがいる。カナダとアメリカをベースに活躍するブル・ライダー、芝原仁一郎さんだ。

ブル・ライディングは、荒馬ならぬ猛牛(牡牛)を乗りこなす、ロデオの花形競技。体重600~700キログラムは下らないブルの身体には、専用のロープが1本巻かれているだけ。ライダーは片手でロープを握り、もう片方の腕を高々と上げてバランスを取りながら、8秒間、猛烈に暴れるブルの背に留まらなくてはならない。8秒以内に落ちれば失格。上げた手が牛や自分の身体に触れても失格だ。

「いつ牛の足元に投げ出されるかわかりません。8秒という時間は、とても長く感じられます」。

8秒経ってブルから飛び降りる瞬間でさえ、油断はできない。ロープ

が手に絡んで大事故になったり、興奮した牛に跳ね飛ばされたりして、半身不随になったライダーや、命を落としたライダーもいる。

「ブル・ライディングには大怪我がつきもの。世界一危険なスポーツといわれるゆえんです」。

かく言う芝原さんの身体にも、すでに骨盤にボルトが3本、顔にも骨を固定するプレートが入っている。

かつてカウボーイが活躍した北米では、馬(牛)術をスポーツ競技にしたロデオは、今も最高にエキサイティングなイベントだ。ブルが暴れば暴れるほど観客は熱狂し、勇敢なブル・ライダーの名声は轟き渡ることになる。

なぜ彼らは牛に乗る? 知りたければ乗ってみよう

社会人2年目の夏に、旅先のテキサスで見たロデオ。芝原さんはそこでブル・ライディングと出会った。

「衝撃でしたね。とにかくカッコいい。一方で、『なぜ彼らは牛に乗るのだろう?』と不思議でした。その答えを知りたいなら、自分で乗ってみるしかない。そう思うようにな





Profile 芝原仁一郎（しばはら・じんいちろう）：1971年、北海道生まれ。'94年、アメリカ・テキサス州で見たブル・ライディングに強烈な印象を受けて、カウボーイを志す。翌年、夢実現のため、ワーキング・ホリデー制度でカナダに渡り、2003年、日本人として初めてPBR（Professional Bull Riders, Inc.）の許可証を取得。'08年8月、PRCA（Professional Rodeo Cowboys Association：全米プロフェッショナルロデオ協会）でプロの証であるCard Holderとなる。

多くの友と出会えた喜びこそ、
僕がブルに乗り続ける理由なんです。



ったんです」。

帰国した芝原さんは、勤め先の同僚たちに「カウボーイになる」と宣言し、まもなく退職。1995年にカナダのワーキングホリデー・ビザを取り、ロデオが盛んなアルバータ州の牧場に仕事を見つけて住み込んだ。高校や大学にもロデオ・クラブがあるほどの、芝原さんにとっては願ってもない土地柄だ。反面、今でこそ不自由を感じない英語も、当初はまったくできなかったという。

「英語は独学です。辞書を引き引きの会話でも、地元の人たちの中にどっぷり身を置いたことが、結局は早道でした。友達もすぐにできました。カウボーイになるために来た、ブル・ライディングをやりたいんだ、と話すと、皆すぐ受け入れてくれたのです。いろいろ教えてもらったし、彼らの薦めでロデオ・スクールを見つけ、ブル・ライディングのコースにも通いました。初めは、おとなしい練習用の牛の背からも、軽いひと跳ねでたちまち投げ出されましたけどね(笑)」。

情熱を共有する仲間との 出会いに支えられて

こうして始まったロデオ人生も、まもなく15年。ブル・ライダーは賞金が収入源。その賞金は各試合で上位数名だけに支払われる。年間2000万円相当を稼ぎ出すプロもいるが、勝たなければ1ドルにもならないのだ。日本でアルバイトをしては資金を貯め、アメリカやカナダで競技経験を重ねるといふ、厳しい駆け出し時代が続いた。

このまま続けてプロ資格を取るべきか、見切りをつけてすっぱりやめるべきか。30歳を過ぎて悩み始めた時、1970年のワールドチャンピオン、ゲーリー・レフェューに出会った。

「彼はぼくに、You are in the right place, at the right time. (何を迷うことがある?) と言ってくれたんです。本気でプロになることを決意したのは、あの時の言葉に背中を押されたこともあったと思います」。

全米プロフェッショナルロデオ協会では、年間獲得賞金総額1000ド

ルを、プロになるための条件として定めている。芝原さんがこの規定をクリアしたのは、2008年のこと。ブル・ライディングを始めてから実に13年をかけ、晴れて正式なプロのブル・ライダーとなったのである。

「なぜブル・ライディングを続けるのか」と改めて尋ねると、少し考えて答えが返ってきた。

「理屈が通じない動物との闘いであること、限界への挑戦……理由はいろいろありますが、一番強く感じているのは、情熱を共有する多くの友と出会えた喜びです。国籍が違おうが、肌の色が違おうが、一度ブルに乗れば仲間、とばかり、道具一つ持っていなかったぼくの面倒を、彼らは本当に親身に見てくれました。ロデオの世界で偏見や差別を受けたことは、一度もありません」。

次の目標は、より手強いブルと精鋭ライダーが集まる、ユタ州を含む地方大会の決勝への出場。その日を目指し、芝原さんの8秒間の闘いが、アリーナを揺るがす大歓声をバックに、今日も幕を開ける。



思うようなパフォーマンスができず落ち込むことも多かった、と語る芝原さん。しかし、不屈の闘志でブルに挑み続けプロとなった今、尊敬するロデオの英雄たちからも、熱いエールが届くようになったそうだ。

Bull Rider

芝原仁一郎
Jinichiro Shibahara

FILE#23

8秒間にすべてを賭ける 大和魂のカウボーイ

言葉の壁や国境を越えて世界で活躍している、「あっぱれ」な日本人をご紹介しますこのコーナー。今月は、ブル・ライディングのプロとして活躍している、芝原仁一郎さんにお話を伺います。暴れる牛に8秒間乗り、その乗り方と牛の暴れ方で採点されるという危険なスポーツ。芝原さんはなぜこの世界に足を踏み入れ、チャレンジを続けているのでしょうか？

text: Yoko Tanaka photos: Scott Klepper

勝負は8秒! ロデオの花形、 ブル・ライディング

8秒間という時間は、あなたにとってどんな長さだろうか? ミルクの1杯も温められない、あくび一つする間に過ぎてしまうほど短い時間。そんなわずかな刹那で、命懸けの勝負に挑むプロがいる。カナダとアメリカをベースに活躍するブル・ライダー、芝原仁一郎さんだ。

ブル・ライディングは、荒馬ならぬ猛牛(牡牛)を乗りこなす、ロデオの花形競技。体重600~700キロは下らないブルの身体には、専用のロープが1本巻かれているだけ。ライダーは片手でロープを握り、もう片方の腕を高々と上げてバランスを取りながら、8秒間、猛烈に暴れるブルの背に留まらなくてはならない。8秒以内に落ちれば失格。上げた手が牛や自分の身体に触れても失格だ。

「いつ牛の足元に投げ出されるかわかりません。8秒という時間は、とても長く感じられます」。

8秒経ってブルから飛び降りる瞬間でさえ、油断はできない。ロープ

が手に絡んで大事故になったり、興奮した牛に跳ね飛ばされたりして、半身不随になったライダーや、命を落としたライダーもいる。

「ブル・ライディングには大怪我がつきもの。世界一危険なスポーツといわれるゆえんです」。

かく言う芝原さんの身体にも、すでに骨盤にボルトが3本、顔にも骨を固定するプレートが入っている。

かつてカウボーイが活躍した北米では、馬(牛)術をスポーツ競技にしたロデオは、今も最高にエキサイティングなイベントだ。ブルが暴れば暴れるほど観客は熱狂し、勇敢なブル・ライダーの名声は轟き渡ることになる。

なぜ彼らは牛に乗る? 知りたければ乗ってみよう

社会人2年目の夏に、旅先のテキサスで見たロデオ。芝原さんはそこでブル・ライディングと出会った。

「衝撃でしたね。とにかくカッコいい。一方で、『なぜ彼らは牛に乗るのだろう?』と不思議でした。その答えを知りたいなら、自分で乗ってみるしかない。そう思うようにな



Profile 芝原仁一郎 (しばはら・じんいちろう) : 1971年、北海道生まれ。'94年、アメリカ・テキサス州で見たブル・ライディングに強烈な印象を受けて、カウボーイを志す。翌年、夢実現のため、ワーキング・ホリデー制度でカナダに渡り、2003年、日本人として初めてPBR (Professional Bull Riders, Inc.)の許可証を取得。'08年8月、PRCA (Professional Rodeo Cowboys Association : 全米プロフェッショナルロデオ協会) でプロの証である Card Holder となる。

多くの友と出会えた喜びこそ、
僕がブルに乗り続ける理由なんです。

ったんです」。

帰国した芝原さんは、勤め先の同僚たちに「カウボーイになる」と宣言し、まもなく退職。1995年にカナダのワーキングホリデー・ビザを取り、ロデオが盛んなアルバータ州の牧場に仕事を見つけて住み込んだ。高校や大学にもロデオ・クラブがあるほどの、芝原さんにとっては願ってもない土地柄だ。反面、今でこそ不自由を感じない英語も、当初はまったくできなかったという。

「英語は独学です。辞書を引き引きの会話でも、地元の人たちの中にどっぷり身を置いたことが、結局は早道でした。友達もすぐにできました。カウボーイになるために来た、ブル・ライディングをやりたいんだ、と話すと、皆すぐ受け入れてくれたのです。いろいろ教えてもらったし、彼らの薦めでロデオ・スクールを見つけ、ブル・ライディングのコースにも通いました。初めは、おとなしい練習用の牛の背からも、軽いひと跳ねでたちまち投げ出されましたけどね (笑)」。

情熱を共有する仲間との 出会いに支えられて

こうして始まったロデオ人生も、まもなく15年。ブル・ライダーは賞金が収入源。その賞金は各試合で上位数名だけに支払われる。年間2000万円相当を稼ぎ出すプロもいるが、勝たなければ1ドルにもならないのだ。日本でアルバイトをしては資金を貯め、アメリカやカナダで競技経験を重ねるといふ、厳しい駆け出し時代が続いた。

このまま続けてプロ資格を取るべきか、見切りをつけてすっぱりやめるべきか。30歳を過ぎて悩み始めた時、1970年のワールドチャンピオン、ゲーリー・レフェューに出会った。

「彼はぼくに、You are in the right place, at the right time. (何を迷うことがある?) と言ってくれたんです。本気でプロになることを決意したのは、あの時の言葉に背中を押されたこともあったと思います」。

全米プロフェッショナルロデオ協会では、年間獲得賞金総額1000ド

ルを、プロになるための条件として定めている。芝原さんがこの規定をクリアしたのは、2008年のこと。ブル・ライディングを始めてから実に13年をかけ、晴れて正式なプロのブル・ライダーとなったのである。「なぜブル・ライディングを続けるのか」と改めて尋ねると、少し考えて答えが返ってきた。

「理屈が通じない動物との闘いであること、限界への挑戦……理由はいろいろありますが、一番強く感じているのは、情熱を共有する多くの友と出会えた喜びです。国籍が違うが、肌の色が違おうが、一度ブルに乗れば仲間、とばかり、道具一つ持っていなかったぼくの面倒を、彼らは本当に親身に見てくれました。ロデオの世界で偏見や差別を受けたことは、一度もありません」。

次の目標は、より手強いブルと精鋭ライダーが集まる、ユタ州を含む地方大会の決勝への出場。その日を目指し、芝原さんの8秒間の闘いが、アリーナを揺るがす大歓声をバックに、今日も幕を開ける。



思うようなパフォーマンスができず落ち込むことも多かった、と語る芝原さん。しかし、不屈の闘志でブルに挑み続けプロとなった今、尊敬するロデオの英雄たちからも、熱いエールが届くようになったそうだ。